

## ✠007 契 約

サムエル記上 18 章に、ダビデとサウル王（イスラエルの最初の王）の息子、王子ヨナタンとの深い友情を記録した箇所があります。

ダビデと出会ったヨナタンの心は捕えられ、深くダビデを愛しました。それでヨナタンはダビデと契約を結ぶ（ヨナタン一族の安全の保証はダビデ個人に対してだけではなく、ダビデの家に属するすべてのものとの契約であった）ことにしました（サムエル記上 20 : 17）。

当時の契約を結ぶための方法は、契約を結ぶ双方が生贄（いけにえ）となる動物を屠って、それを二つに裂き、その間を二人が歩くというものでした。そして二人が、自分の手に刃物で傷をつけて血を流した上で握手をしました。これは、契約がいのちをかけるものであることを象徴する行為です。

ダビデとヨナタンの間に結ばれた契約は、サウル王朝が崩壊した後、証明されました。この契約の恩恵を受けたのは、ヨナタンの息子（サウルの孫）であるメフィボシェトであった。

歴史的に見ると、王朝交代のときには、新しい王朝が確立するために、古い王朝にある者は皆殺しされることが普通でした。サウル王朝が崩壊したならば、サウルの血を受け継ぐ者は皆、殺されてもおかしくありませんでした。しかしダビデ王は、「あなたの父ヨナタンのために」（サムエル記下 9 : 7）、そのメフィボシェトを助けました。「ヨナタンのために」とは、“ダビデがヨナタンと結んだ契約の故に”、という意味です。

ダビデが王朝を確立した時、ダビデはヨナタンとの契約を思い起こし、ヨナタンの血に繋がる者に恵みを与えたいと思いました。ヨナタンの子メフィボシェトは、王朝崩壊の混乱によって怪我して足に障害を負い（サムエル記下 4 : 4）、新しい王の目を恐れて地方に隠れて住んでいました。ダビデはサウルの家臣だった者からそのことを聞きだし、メフィボシェトを宮殿に連れてきて、彼が相続するはずだった土地や財産を返還した上に、今後は宮殿に住み、王と共に生活するという特権を与えました（サムエル記下 9 章）。

王の前に連行されたメフィボシェトは、王が自分を殺すのではないかと恐れていました。そんなメフィボシェトに対してダビデは、「メフィボシェトよ」（サムエル記下 9 : 6）と親しく彼の名前を呼び、「恐れることはない」（サムエル記下 9 : 6）と優しく彼を力づけました。

殺される運命にあったメフィボシェトは、「恐れることはない」というダビデの優しくも力強い言葉を聞いて、驚きました。

ダビデはメフィボシェトに「わたしはあなたに忠実を尽くそう」（サムエル記下 9 : 7）と宣言しました。それは、あなた自身の故にではなく、あなたの父ヨナタンと私が結んだ契約に故にである、と説明しました。

恩恵を受けたメフィボシェトは、「死んだ犬も同然のわたしを顧みてくださるとは。（死んだ犬のような自分が、いったい何者だからと言うので、このような恵みを施してくださるのですか?）」とダビデに尋ねました（当時、犬は不潔で好まれない動物とされていた）。

確かに彼自身が言うように、メフィボシェトは、それまで惨めで絶望的な境遇にありました。ダビデが与える待遇を受けるのに、彼に相応しいことは何もありませんでした。

メフィボシェトが恵みを受けたのは、彼自身の故ではありませんでした。彼の行いや品性、功績な

どの故に恵みを受けたのではありませんでした。

ただダビデ王が、彼の父ヨナタンと結んだ契約の故だったのです。

イエス・キリストは、「このぶどう酒は、わたしの契約の杯だ」(ルカ 22 : 20) と宣言されました。この契約とは、父なる神と御子なる神キリストとの間に結ばれた契約です。キリストは、聖餐に与るすべての人々の罪をご自分で負われ、本来は罪人である私たちが受けるはずだった神の怒りと裁きを、代わって受けて下さいました。イエス様が血を流して神様との契約を全うして下さいました。このキリストの血によって、父なる神は私たちの罪を赦し、私たちを子として受け入れてくださったのです。

旧約時代に神は、人との間に契約を結ばれました。しかし誰一人として、この契約を守る人はいませんでした。ただイエスさまだけが、神様と結ばれた契約、血の契約を守ることが出来たのです。メフィボシェト自身は、王家の交わりに加えられてからも、それ以前と何ら変わるところがありませんでした。天のお父様は、私たちを見るのではなく、イエス様と結ばれた契約の故に、イエス様が流された血潮をごらんになり、私たちを受け入れてくださっているのです。

全人類はやがて来る神の裁きの前に立たなければなりません。しかし、キリストを信じる者は、キリストが代わって裁きを受けてくださっているのです。裁きは過越され、神に受け入れられるのです。私たちは無条件に神に受け入れられるのです。